

[パートナー]

気持ちのいい暮らしとの出会い

Partner[®]

7.8

1998
JUL./AUG. 合併号
No.330



イタリア 街道の旅。

バルマ、モデナ、ボローニャ、そしてフィレンツェ。
街道に点在する歴史的な財産と
個性豊かな文化に溢れた田舎町へ。
もうひとつのイタリアに出会う、新たな体験の旅。

J. K. M. S.



「SUTOR MANTELLASSI」
Piazza della Repubblica, 25/r
☎055-287275 Fax055-218504
休日曜、月曜午前



上質な服を身に着けても肝心は靴。 だからこそ、その一足に魂を込める。

MAURO RAIMONDI ●マウロ・ライモンディ
SUTOR MANTELLASSI ●スートル・マンテラッシ



レジナという道具で麻糸を通していく。



「一足一足に魂を込めるんだ」。大切にしてほしいからメンテもしっかり縫い目にもクリームを。

男女とも同じデザインの「NORVEGESE CON FIBBIA」というモデル。これは女性用。価格44万リラ。

自分も靴が大好きだという親方は、この日もなかなか洒落た靴を履いていた。どんな良い服を着ていても、いちばん肝心なのは靴だという。だから真つ先に目がいくなのはいつも足元なのだそう。53年のキャリアだ。1日平均12時間は工房にいる。時間など気にしない。良い物を作るには時間がかかるのは当然なのだ。革選びから仕上げまで人にまかせない。自分が今作る靴は他のものとは異なる一足なのだ、と魂を込めて作り上げる。2回の手縫いの部分だけで160分かかかる。丈夫で型くずれせず足なじみがよい理由の秘密はこんなところにもある。定年になるそうだが死ぬまで作り続けるそうだ。



「Bianco Bianchi & Figli」
Viale Europa, 117
☎&Fax055-686118
休日曜、土曜(予約によりオープン)

ひとりて覚えたこの仕事は「デザインや色彩感覚が必要」。



歴史に残る作品からすべてを学び、 現代に象嵌を復活させた職人。

BIANCO BIANCHI ●ピアンコ・ピアンキ
BIANCO BIANCHI & FIGLI ●ピアンコ・ピアンキ&フィーリ



ベアストを象嵌する基板を彫る作業。



丸テーブルは200万リラ。船便の配送可。

ローマ時代から存在するという古い象嵌の技法で17世紀、トスカナ地方に普及し、その素晴らしいうルネサンス期の作品は現在ピッツティ宮で眼にすることができ。一時期、消滅したこの幻の技法を再発見し、復活させた親方がいる。もともと絵が好きで、ある日、美術館で見た17世紀の装飾画をきっかけに、ひとり始めた。教わる職人も残っていなかった。手ごかりはフィレンツェに残る昔の作品や破片のみ。以来、自宅の台所の食卓に最初の試作を刻んでから、50年間中断することなく現在に至るのである。あのヴェルサーチも「メドゥサ」をほどこしたテーブルをいくつも注文した。



「C. MOSCARDI」
Lungarno Corsini, 36/r
☎&Fax 055-214414
休日曜、月曜午前。日本まで発送可。

彫刻と絵と額縁のプロポーションを見る「勘どころ」が重要。



額縁と絵画が互いに引き立て合う。 その「勘どころ」を見るマエストロ。

GIULIANO BIANCHI ●ジュリアーノ・ピアンキ
C. MOSCARDI ●C・モスカルディ



使い込んだノミで彫る、商品はすべて注文制作。日本まで発送してくれる。楕円形の額縁65万リラ。

購入した絵画や版画のため、修復のため、写真フレームを探し、あるいはコレクターとして訪れる人の目的はさまざまである。王室御用達、創業1894年の老舗である。美術学校で学んでから、この店に入り53年。アルノ河の洪水ですべてを失う経験もしたが、創業者から受け継いだ看板を守り続けている。額縁を作るにはさまざまの工程があるが、親方の専門は、彫刻である。見事な手彫りの技である。これが金箔を張られたり彩色の化粧をほどこされ仕上がる。優れた額縁職人はデザインと様式に精通していなければならない。親方が目の前でサツと描くデッサンは的確、作品とのバランスが鍵。